

東京バッハ合唱団 月報

[第 544 号] 2007 年 10 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.544
October 2007

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

フライブルクのポイアーレ氏より返信 :

訳詞演奏 バッハの音楽言語の普遍性を証示

H. M. ポイアーレ

大村恵美子様

もう「夏の夜のバッハ」の催しも終わって、今は野尻湖にいらっしゃる頃でしょうか。湖畔でさぞかし良き時を共有され、土曜日の神山教会でのコンサートもきっと成功裡に終えられたことと存じます。

私どもも、先週土曜のコンサートを成功裡に終え、打ち上げの夏まつりは解放感で大いに愉快的会になりました。

お送りいただいた「月報」¹⁾をこちらで配布したところ、団員の興味を引いて、何人かは月報記事の、
も読みたいと言っていました。お忙しいところ恐縮ですが、いずれこれらの記事もドイツ語ないし英語に翻訳していただけたら幸いです。(FAX ないし e-mail でお送りくだされば結構です。)

さて、東京バッハ合唱団のマタイ受難曲およびカンタータの演奏のCD録音、じっくり聴かせていただきました。私は申し上げたい。私は、あなたのお仕事の成果に大変感銘を受けました。日本語のような異質の言語がバッハの音楽にかくもしなやかに適合するというところに、私は驚きました。もちろん、そのばあい、音楽はドイツ語の母音と子音による場合とは異なった響きを持つことにはなりますが、だからといってそれはよくないという意味ではありません。これは、あなたの訳業がいかに入念になされているかということのひとつの証示であり、さらに、あなたが合唱団員に対して、言葉の単なる釈義にとどまらず、言葉の意味と精神をも伝えておられることの証示であると思うのですが、究極的にはバッハの音楽言語の普遍性を証示するものにほかならないでありましょう。どうもありがとうございました。ご厚情に心から感謝いたします！

つぎに、月報掲載の松山でのご挨拶のなかでご提案のこと²⁾、つまり、2009年のドイツ演奏旅行の一環としてフライブルク来訪を希望されていること、についてお答えしたいと思います。はたしてそのようなプランが私どもの側から考えて実現可能かどうかを検討させていただくためには、以下のようないくつかの問題をあらかじめクリアする必要があるように思います。

- ・参加する団員の人数
- ・演奏曲目

・オケが必要か、オルガンだけでよいか、もしくはアカペラ演奏か？

・団員のうち民宿希望者の人数

・演奏旅行の日程と、フライブルク来訪の時期

以上のような問題にできるだけ早期にご返答いただければ、幸甚に存じます。もちろん、9月13日までは当方も夏休みですので、それ以前には、合唱団の責任者および団員自体と相談することは、もともとできませんから、いずれにせよ、それまではゆっくりご検討ください。

さいごに一筆。多分すでに橋本眞行(氏)からお聞きおよびのことと思うのですが、私たちは今年11月にベートーヴェンの第9交響曲(およびOp.80の合唱ファンタジー)を演奏する予定で、この演奏にはフライブルクの9つの姉妹都市のすべてに参加を呼びかけました。橋本氏によると、松山バッハ合唱団からも少数の参加者があるとのこと。今年5月/6月の素晴らしい出会いがありましたから、当然、貴合唱団の方々にも参加を呼びかけたいと考えたのですが、当方の予定期間(2007年11月3~11日)は、東京バッハ合唱団自体の練習予定日程と重なるうえに、橋本氏自身も11月にはフライブルクに来ることはできない、と聞いて、呼びかけを断念いたしました。

貴合唱団の今後の企画のすべてのご成功を祈ります。あなたと、あなたの合唱団のメンバーにこころからご挨拶申し上げます。

2007年8月4日

ハンス・ミヒャエル・ポイアーレ

(日本語訳: 森永毅彦)

ポイアーレ(Hans Michael Beuerle)氏は、フライブルクバッハ合唱団芸術監督・指揮者。松山バッハ合唱団(橋本眞行氏主宰)との長年の交流が続いている。本年6月のマタイ合同公演(松山市)には当団からも有志参加が実現した。

1) 月報[第541号]2007年7月号.記事 大村「フライブルクで、松山で、東京で、Auf Wiedersehen!」、三好・大庭・金子「東京でのポイアーレ先生」、菅間、島津両氏の松山マタイ演奏会感想文、東京マタイ演奏会『記念文集』発行。とは全文を、他は表題のみを、森永氏にドイツ語に訳していただき、本紙に添えてお送りした。

2) 2009年に、第5回目となるドイツ演奏旅行をおこなう計画があり、関係方面と折衝中。

野尻湖合宿に参加して

日本語でモテット 言葉が受肉したような感動

八重樫 捷朗

東京で神学校に通っている妻が、東京バッハ合唱団に入団したことが縁で、今年の夏、仙台から野尻湖の合宿に参加させていただき、楽しい3泊4日の時をすごすことができ、ありがとうございました。神山教会での演奏会で、大好きなモテット3番を日本語で歌えたことは貴重な体験となりました。

私は、今年創立40年を迎えた仙台宗教音楽合唱団の創立に関わった者ですが、仙台で東京バッハ合唱団より5年おくれのスタートで、創立当時は大村先生の著書『バッハ合唱団の十年』を道しるべに、バッハのカンタータを歌う会として合唱団形成をめざしたものでした。

野尻湖合宿後、大村先生より合唱団の40年の記録やマタイ受難曲の記念文集をおくっていただき、合唱団の歩みをくわしく知ることができました。45年の歩みに敬意を表するとともに、仙台の合唱団の歩みとも重なって、本当に身近に感じられました。

私にとってバッハのカンタータは私の信仰のシュプレヒコールと思って歌ってきましたが、神山教会で、モテット3番を日本語で歌った体験は、まさに言葉が受肉したような感動でした。われここに立ちて歌う 大いなる安らぎもて… という歌詞が、心の叫びとなって歌うことが出来ました。

大村先生が「月報」の104号(1971年3月)にモテットの原語上演のことで書いておられます。「いちばん肝要なことは、うたう本人が本当にそのテキストによって、心をかきたてられるということなので、それが欠けるかぎり、何ごとも始まるわけがありません。(…略…)歌うという行為の場合には、できればなるべく無意識の部分が多いほうがよく、無意識の底からつきあがるものがあってそれが自分自身の感動となり、ひとを動かすものになってゆくのだと思います。」(『東京バッハ合唱団三十年の歴史』p.101に収載)

ドイツ語の歌詞を(頭のなかで)日本語におきかえながら長年歌ってきた私にとって、神山教会でのモテットが自分の歌として新鮮な響きとなって伝わってきました。「歌いながら古いドイツ語の詩の内容を、理解した上でさらに共感しようというのは、凡人にはとてもやりきれない芸当(同上p.102)まさにその通りです。「音楽歴、合唱歴のゆたかな一部の教養人たちが得意になってひけらかすモテットではなく、庶民が平気でなでまわしているうちに、発見してゆくモテットを、私はききたいのです」(同上p.103)という大村先生の主張が本当に実感できた思いでした。

『創立45周年記念「マタイ受難曲」演奏会記念文集』も読ませていただきました。仙台でも2年がかりで仙台初演したころのことを思い出しました。合唱団員数がふくらみ、裾野が広がり、バッハが多くの人の輪として広がりを見せました。

野尻湖合宿の最終日、遊覧船のなかでバスの団員の方との「私の兄弟はみなクリスチャンですが、私はまだできてね」というような会話がありましたが、私は「受難曲歌われるところ教会あり」という、仙台でのマタイ受難曲演奏当時どこかの牧師が話されたことを紹介しました。受難曲を心をこめて歌うことは、礼拝に相当することだと私は心からそう思います。

合宿中は、早朝テニスを楽しんだり、最後の晩は夜中まで酒をくみかわして、遠方から参加した私のような者を、昔からの団員のようにあつかっておもてなしいたごき、本当に居心地のよい楽しい時でした。

合唱団が生き生きした一つの共同体として、バッハの世界をより多くの人びとと共有できるような活動を継続されますよう、心からお祈り申し上げます。

(東北学院中学高等学校・生活指導主任)



野尻湖 2007

神山教会特別演奏会

8月4日、午後7時

直前までの雨が上がった神山教会。写真は3枚とも松尾茂春氏撮影。

開演を待つ客席。多くが当コンサートのご常連で、夏ごとの再会を楽しみにしている。野尻湖協会(NLA)の滞在者が中心。



光野孝子さん(ソプラノ)の2曲の独唱カンタータ(BWV52, BWV84)を中心に、ヴァイオリンソナタ(BWV1019)と、5部合唱によるモテット第3番(BWV227)が演奏された。ヴァイオリンは丹沢広樹さん、ピアノは若土規子さん。



【出版協力募金】報告

2007年9月30日現在

ご応募: 74名(ご寄付、楽譜・CD購入など)

合計額: 4,873,000円(以上累計)

達成率: 48.7%

目標 1000万円



モテット第 3 番 イェス よろこび
モテット第 1 番 歌え 主に向かいて 新たな歌

バッハにおけるモテット

橋本 眞行

バッハのモテットは、同じ声楽作品のカンタータの数に比べると極めて少なく、現在 8 曲程度がモテットとして分類されるに過ぎませんが、バッハ音楽の真髄を語る小宇宙ともいうべき作品群です。モテット作品を概観するだけでも、バッハにはすべてが流れ込んだ、と語られるような、当時の壮大かつドラマティックな音楽史に心を躍らせることができます。

モテットとは？

モテットとは、中世フランス語の < mot > を語源とし、13 世紀頃から発展し始めた世俗ポリフォニー歌曲に起源を求めるとされています。< mot > (ことば) という語源が示すように、一般的には歌詞のもつ語感や響き、また、その意味やイメージを音楽的に処理する方法を用いて作曲された多声 (ポリフォニー) の声楽曲をさします。

ルネッサンス期にかけて聖書の言葉を歌う宗教的合唱として発展し、15・16 世紀の最盛期には、定常文を歌うミサ以外のすべての宗教曲を総称するまでになっています。ネーデルランド楽派と、少し遅れてヴェネツィア楽派を中心に発展しましたが、バッハを遡ること 100 年前の音楽家シュッツ、シャイン、シャイトなどがそれらを学び、ドイツへ持ち帰ったのでした。それ以降、ルターにより提唱され、ドイツプロテスタント教会に浸透していたドイツ語のコラール (賛美歌) がモテットに取り入れられたり、またヴェネツィア楽派で有名な複合唱様式が盛んになったりしました。

さらに、フランス風序曲やイタリアの協奏曲様式に代表される管弦楽や、あるいはイタリア・イギリスのオペラなど、他のジャンルの音楽の新しい傾向の移入があいつぎ、ドイツの、とくに北ドイツでの華麗で技巧的な手法のオルガン曲 (トッカータ、ファンタジー、コラール変奏など) や、対位法 (フーガ) の発展などとあいまって、バッハが歴史に登場した 17 世紀後半は、ドイツ音楽において音楽的要素のまさに百花繚乱たる時代でした。

バッハのモテット

教会音楽家としてのバッハにとって、作曲の中心は礼拝の中の音楽でしたが、初期 (ミュールハウゼン、ヴァイマル時代) はオルガニストとしてオルガン曲を書き、中後期 (ライプツィヒ時代) はカンテール (合唱長) として、カンタータ・受難曲などを手がけました。モテットも礼拝の中で歌われてはいましたが、当時は伝統的に

ラテン語の歌詞のモテットが使われており、新作ものが求められていなかったことから、バッハにとって作曲する必然性はありませんでした。

バッハのモテットはライプツィヒ時代に、主たる礼拝ではない夕拝や、葬式・誕生日・新年など特別な行事のために作曲されたと考えられています。いくつかは追悼式のために作曲され、バッハが友人エールトマンに宛てた手紙の中で、「いつもより葬式が多い場合には、それに応じて臨時収入もふえるのでありますが、ひとたび健康の風が吹くと、反対に収入は減り、たとえば去年は、葬式によって普段得られる収入を、100 ターラー以上も失ったようなしだいでありませぬ。」(ガイリンガー/角倉一朗氏訳) と書き送ったことから、当時の作曲の事情をうかがい知ることができます。

モテット第 3 番 イェス よろこび

この曲は、規模の大きさ、各楽曲の性格づけの明確さとそれらの相互関連の緊密さ等において、バッハのモテットのなかで最も秀でたもので、モテット第 1 番の明るさとは対照的な深く思索的、かつドラマティックな名曲です。

このモテットは、バッハがトーマスカントールになって 2 カ月も経たない 1723 年 7 月 18 日、ライプツィヒの中央郵便局長未亡人の追悼式の際に演奏されたと考えられています。その時の説教で朗読された新約聖書の「ローマ人への手紙」(ロマ書) 第 8 章がこのモテットのテキストに用いられていることから、そのように推測されています。

2 声のソプラノを含む 5 声を必要とし、11 節からなるこの曲の最大の特徴は、コラール (J. フランク「イェスよ、わが喜び」1653) の 6 つの詩節の間にロマ書の聖句が挿入されるという特殊な構造をもっていることです。それも、下記のように第 6 曲を中心に明確なシンメトリ (対称性) を形づくり、全体の統一感を保つという素晴らしい発想がみられます。

1. コラール (4 声 SATB) 和声型 (フランク第 1 節)
2. 聖句 (5 声 SSATB) モテット型 (ロマ書 8 : 1)
3. コラール (4 声 SATB) 装飾型 (フランク第 2 節)
4. 聖句 (上 3 声 SAT) モテット型 (ロマ書 8 : 2)
5. コラール (5 声 SSATB) 自由型 (フランク第 3 節)
6. 聖句 (5 声 SSATB) フーガ (ロマ書 8 : 9)
7. コラール (4 声 SATB) 装飾型 (フランク第 4 節)
8. 聖句 (下 3 声 ATB) モテット型 (ロマ書 8 : 10)
9. コラール (上 4 声 SSAT) 自由型 (フランク第 5 節)
10. 聖句 (5 声 SSATB) モテット型 (ロマ書 8 : 11)
11. コラール (4 声 SATB) 和声型 (フランク第 6 節)

ヨーハン・フランク作の神秘的なコラールと、それを注釈する聖句とが織りなす生と死のドラマを、バッハ研

究の基礎をきずいた、あのシュヴァイツァーはその著書の中で「比類なく深い、偉大な思想に基づいている」、「生と死についてのバッハの説教と名づけることができるであろう」と述べています。

さてここから、モテットのモテットたる所以(言葉にもとづく音楽)に迫りましょう(日本語歌詞を で示す)

第 1 曲は和声型の簡素な形のコーラルで始まり、第 2 曲では 歩まず という言葉(原詞 wandeln: さまよう)を不規則なリズムと音形を持つメリスマ(歌詞の 1 音節に対していくつかの音符を当てはめたフレーズ)で、第 3 曲では サタン や 敵(あだ)を荒々しい表情で、またイエスの庇護 = まもりたもう を静けさで、また第 4 曲では 解き放ちたまえり 罪と死の掟より というテーマ、すなわち魂が空中に漂うイメージを、通奏低音の声部(バス)を置かないことで表現しています。第 5 曲ではキリスト者の強い意志をユニゾンで示し、ほろび砕けよ (tobe: 荒れ狂え)を、バスのメリスマで、さらに どよめけど (brummen: ほえる)では、全パートがほえる様子を力強いメリスマであらわしています。

そしてこのモテットの中心となる第 6 曲には、壮大なフーガが置かれ、曲の主題が語られます。フーガに続く アダージオ み霊なきもの 主につけるものにあらず の部分では、重い足取りをあらわす音型と「痛みのモチーフ」を組み合わせて み霊なきもの が苦悩する様子をあらわし、第 7 曲でも なやみ 痛み を「ため息のモチーフ」をもちいて強調しています。第 8 曲の キリスト いまさば では、み霊をいただく確かな心の状態をあらわすために、イエスの声部であるバスを核に下 3 声の編成をとっています。ここでも いのちに あらん (Leben:いのち)に生き生きとしたメリスマが用いられています。第 9 曲 わかれん この世に では、前曲とは逆に、地上から離れる状態を表現するために、バスのない上 4 声の編成としています。コーラル定旋律がアルトに置かれ、通奏低音にかわるテノールの淡々としたリズムの上に 2 つのソプラノが情緒的に辞世を歌います。第 10 曲は第 2 曲と同じ発想で書かれ、このモテットの特徴であるシンメトリーを強く感じさせます。終曲(第 11 曲)は第 1 曲と同じ和声型の簡素な形のコーラルで、死に際してイエスに帰依する喜びを語ります。

モテット 1 番 歌え 主に向かい 新たな歌

かつてモーツァルトはこの曲をはじめてライブツィヒの聖トーマス教会合唱団の演奏で聴いたとき「これはいったいなんだ?」、「久しぶりで学ぶに足る曲に出会った」と叫んだという(口ホリッツ/杉山好氏訳)。また、あのヴァーグナーは彼のエッセーのなかで「ハーモニーの波がうねる海のごとき、轟音をたてる、躍動的な旋律の抒情豊かな飛翔」と形容し、称賛したという(ゲック/鳴海史生氏訳)。また、20 世紀初頭のトーマスカ

ントールであった B.F. リヒターは「巨大な合唱交響曲」と称したという。このように多くの専門家を唸らせてきたこのモテットは、モテット 3 番とともに合唱音楽の最高峰の一つです。

この曲は、同じタイトルの新年用のカンタータ(BWV190)があるため、同様の目的のために作曲されたと考えられたり、また権力者の誕生日祝いであるとか、第 2 楽章の歌詞から推して葬儀に用いられたのだろうといった研究がありますが、本来の作曲目的の特定はできていません。それぞれ歌詞の内容に応じて趣の異なる 4 つの楽章から成りたっており、ヴェネツィア楽派の影響を受けた 2 重合唱という規模の大きい編成となっています。歌詞は、第 1 楽章は旧約聖書の詩篇 149 編 1-3 節から、第 2 楽章は J. グラマンのコーラル「いざ、わが魂よ、主を頌めまつれ」(1530)の第 3 節と由来不詳のアリア歌詞から、第 3、第 4 楽章は詩篇 150 編 2 節と 6 節から取られています。

第 1 楽章は、バッハが得意としたオルガン曲の「前奏曲とフーガ」の形をとり、151 小節からなる楽章のちょうど半分のところからフーガが始まっています。「前奏曲」の部分では、うたえ という言葉に対し、2 種類のモチーフが用いられ、組み合わせられて素晴らしい効果をあげています。すなわち、いくつもの教会で一斉に鳴らされる祝祭的な鐘の音(ガラン、ゴロン)をイメージさせる 4 分音符 2 つからなるモチーフと、その鐘の音が村々をわたっていく様子をイメージさせる長いメリスマがそれですが、それだけで音画として歓びに満ちた表情を描き出しています。さらに よろこべ という言葉に対し、カンタータでもしばしば使われる「喜びのモチーフ」を用いています。フーガの部分は比較的厳格な手法で書かれています。ここでも 来たりて 主のみ名をあがめよ という箇所では長いメリスマで「列」(原詞 Reihen は踊りの列を意味する)の長さを示し、つづみと琴もて は太鼓をたたくりズムとハーブを奏でる音形を用いて歌詞の内容を鮮やかに表現しています。

第 2 楽章は、一転して神への信頼のコーラルと祈りの歌とが対話形式をとり、静かで叙情的な音楽が歌詞の意味合いを深めています。

第 3 楽章では、ふたたび「喜びのモチーフ」を基調にした音楽を 2 つの合唱が、お互いを競うように歌い交わし、第 4 楽章の、これまで 8 声の 2 重合唱だったものが、4 声に合同して 8 分の 3 拍子のフーガへなだれ込んでゆきます。やはり比較的厳格な手法のフーガはハレルヤ唱を伴って展開しますが、112 小節からなるこの楽章は 32+4+40+4+32 小節にはっきりと分かれ、モテットに多く取り入れられているシンメトリー(対称性)の構成を持っています。そして楽章の最後の部分では、晴れやかに、また高らかに高揚感をもって歌い終わります。

(東京バッハ合唱団副指揮者。

第 101 回定期では、モテット 3 番の指揮を担当予定)

宇佐美桂一氏を送る

大村 恵美子

9月6日に、宇佐美桂一先生が71歳で永眠されました。お知らせをいただき、9日のお通夜に参列しましたが、広いカトリック豊島教会は追悼に集まった人びとでみち溢れました。

献花の間には、ご自身の歌声(録音)も流れ、最後に入院なさる直前まで、歌に専念され、ご旅行も積極的に試みられた、ふだんと変わらない先生と現在も同席しているような心持でした。

東京バッハ合唱団には、早くからご協演いただき、1982年の「マタイ受難曲」では、バス独唱を受けもたれて、第65曲のアリア「きよめよ わが心」は、完璧なまでの美しさ、きよらかさ、力強さで、私たちの心に深く刻みつけられています。「バッハ・カンタータ50曲選」のCDに収録されているものだけでも、1983年から2005年までの間の20曲にものぼり、BWV4および80(1983)、68(1991)、78(2004)、140(2001)、147(2005)等々、名曲ばかりです。

本年3月の「マタイ受難曲」を最後にと念願していらしたようでしたが、残念ながらことしに入ってから断念なさり、ふたたびあの精神性ゆたかで敬虔な、バッハの信仰心そのもののお声に接することは叶いませんでした。それでも、ご病気のおからだをおして、当日は最後までご傾聴くださり、楽屋にまで出向かれて、私たちにねぎらいのお言葉をかけてくださったのでした。

天国にただちに引き揚げられる人間といえば、それはきっと宇佐美先生のような方ではないでしょうか。

満ちたりて 世に生き

憂いもなく 去らん

これはこの夏、私たちが東京・世田谷中央教会と野尻湖・神山教会で演奏した、カンタータ第84番を締めくくるコーラルですが、まさにこの通りの堂々たる人生をとげられたという実感がいたします。(合唱団で長い間歌っておられるバス団員の松尾茂春さんは、8月20日に88歳8か月のお父上を送られ、そのときにもこのコーラルをはなむけに、ご家族全員で合唱されて、その場の空気にすばらしい調和をおぼえられたということです。)

奇しくもこの9月6日は、世界の名テノール、パヴァロッティの永眠も報じられ、宇佐美先生とのお別れと重ねて、私たちの記憶に、この日は深くとどめられることでしょう。

私たちの45年にわたるバッハ演奏も、宇佐美先生のような、心にしみ入る、信仰そのもののお声に支えられて、どれだけ深められたかわかりません。この後も、先生のあとにつづく、人間性ゆたかな独唱者に恵まれますことを、天から見守ってくださるよう、先生に親しく呼びかけたいと思います。宇佐美先生、これからもずっとよろしく願い申し上げます。

fine

彼らは、母マリヤのそばにいる幼子に会い、ひれ伏して拝み、宝の箱をあけて、黄金・乳香・没薬などの贈り物をささげた。(マタイ2:11)

マンテーニャ
Mantegna(1431頃-1506)
三賢王の礼拝
1460頃
板にテンペラ、77×75cm
ウフィツィ美術館



カンタータ第65番 もろびと シバより来たりと『三賢王礼拝の図』

大村 健二

カンタータ「もろびと シバより来たり」は、顕現日の礼拝(毎年1月6日)のために作曲・初演(1724年の同日)された作品です。

顕現日は、キリスト(=救世主)出現の予兆を星にみた博士たち(新共同訳では「占星術の学者たち」)が、誕生後間もない幼子イエスを探しあて、ここに初めて、世のひとびとにキリストの存在が顕現されたことを記念する祝日です。キリスト教では、この「顕現」を、ヘブライの民族宗教のなかでの預言(旧約:ユダヤ教)から、全人類の救いの成就を信じる普遍宗教(新しい契約:キリスト教)へといたる重大な転回点と位置づけます。

上掲図は、新約聖書に記された先きのできごと(「マタイによる福音書」2章1-12節)を描いたものです(今回の定演のチラシに使わせていただいたもの)。図のキャプションでは「三賢王の礼拝」となっていますが、中世以来、諸国語の訳も、したがって日本語の訳も、博士だったり、占星術学者だったり、大いにゆれ動いているようです。数ある「三賢者(という訳もあります)礼拝図」のなかで、この15世紀ルネサンスの北イタリアの画家を選んだのは、派手さ、面白さ、物語性の豊かさにあります。われわれの演奏会を大いに世間に「顕現」させる必要があったからです。

バッハのカンタータが、音楽による信仰の証しであるとすれば、宗教絵画は文字どおり絵解きです。マタイの該当箇所を一読しつつ、チラシをながめてみてください。「(星が)ついに幼子のいる場所の上に止まった」は、右上の天使の一群で現されています。母マリヤとイエスの右手に杖をもって立っているのが父ヨセフでしょうか。ところで、「彼らはひれ伏して幼子を拝み…」の「彼ら」(学者=賢王たち。図正面の3人)の風貌や、後続のらくだと従者たちをふくむ背景のすべては、マタイには描かれていない詳細です。この詳細の背後に「もろびとシバより来たり」の「シバ」の出典も隠されているのであり、ここで初めて、われわれのカンタータと三聖王(と

いう訳もあります)の伝説とが結びつくわけです。

顕現節の礼拝では、上のマタイの箇所とともに、旧約聖書「イザヤ書」60章16節が朗読されます。新共同訳の聖書では「栄光と救いの到来」という見出しがついています。ここに「国々はあなたを照らす光に向かい、王たちは射出するその輝きに向かって歩む。…らくだの大群、メディアンとエファアの若いらくだがあなたのもとに押し寄せる。シェバのひとびとは皆、黄金と乳香をたずさえて来る。こうして、主の荣誉が宣べ伝えられる」と書かれていますが、この下線部分のルター訳ドイツ語聖書の記述を、バッハはそのまま、このカンタータの第1曲の歌詞としました。ここで「シェバ」(ドイツ語ではザバ)とある国名は、日本では「シバ」として定着していました。なぜわざわざ変えたのか、新共同訳の方針には不満です。60年代にはやったミシェル・ローランのシャンソン「シバの女王」が気にさわったのでしょうか。

シバは、旧約聖書のソロモン王の時代にあった王国で、アフリカがアラビア半島のどこかだろうとされています。シバの女王がイスラエルの賢王ソロモンのもとを訪れた、「彼女はきわめて大勢の随員をともない、香料、非常に多くの黄金、宝石をらくだに積んでエルサレムにきた」と旧約「列王記」上10章にあります。

さきの預言(旧約)と成就(新約)という数千年の壮大な図式のなかで、西暦0年当時、待ち望まれる救いの実現は、理想とされたソロモン王の治世に準(なぞら)えられていました。こうして、旧約聖書以来の救い主の待望と、新約聖書での実現(キリスト降誕後の現在)が重ねあわされて語られるようになったのです。

バッハのこのカンタータも、旧約聖書の記述から歌い出されますが、「顕現」の転回点をへて、黄金は 信仰に、乳香は 祈りに、そして没薬は 耐え忍ぶ心へと転回し(第5曲、レチタティーヴォ)、終曲コラルの
いざ主よ 委ねん われをながみ手に という全幅の信頼のなかで曲を閉じます。(団員：テノール)

柳元 宏史

連載：全部おすすめ 50 曲選!! <その8 >

カンタータ第 156 番 墓に 片足入れ

自分の子を失う親の悲しみはいかばかりであろう。つい先日、教会員のご長女が亡くなり教会で葬儀をおこなった。80代で愛娘を失う親の苦悩は察するにあまりある。急激に進行した癌だった。

そして明日は別の教会員のご子息の葬儀に行く。39歳の若さだった。同じく癌である。ご両親にはなにかとお世話になり、この2月末、私の長女の出産のおりには一緒に喜んでくださった。そのころには、すでにご子息の癌をご存知であったのだろうか。そう思うと切ない。呼びかけるとニコニコして幸せを運んでくれる長女を持つ親となった今、自分の子の死は想像するだけで辛い。

バッハは13年間つれ添い、7人の子に恵まれた妻バルバラを出張中に病で亡くしている。死に立ち会うことはできなかった。また再婚までに、3人の子どもを失っている。作曲・演奏活動の途上、もっとも身近な者の死に直面してきた。病臥にある子どもたちの不安と苦しみを辛い気持ちで見守り、必死に快復を祈っていたにちがいない。人生のあまりにも酷な苦しみを経験してきた彼が、1729年、ライブツィヒで初演したカンタータがこの156番である。

「人生の終わりを主題としたカンタータ」、156番の冒頭にある有名なシンフォニアを、大村恵美子氏はこう解説している。「深く静かで悲しく、言葉をもたぬオーボエの旋律が、ほとんど一吹のように滑らかに、人生の始めから終わりまでを描きつくしてしまう。神のみもとに憧れゆく、人生最後の美しさである」(CD第16巻冊子)。そして、最期は神のみ手にゆだねる信仰者の確信を、コラル(第6曲)に集約し、生くるも死ぬるもみこころのまま と神への揺るぎない信頼を告白し、救いの希望を長調で高らかにうたう。

このカンタータが演奏される日に朗読された聖書の内容は、主イエスが、カペナウムの百人隊長の信仰に感動して、彼の部下の病を癒す物語(マタイ 8:1-13)だが、病が奇跡的に癒されようと、反対に死で終わろうと、信仰者はただ一点を見つめ、祈る。それは神のみこころである。バッハはあえて聖書の内容から離れ、病にある者の姿をフォーカスし、みこころを慕い求める信仰の真髄に迫ったのではないだろうか。バッハの祈りともいえるこのカンタータから、深い慰めと励ましを受ける。

(やなぎもと・ひろし。団員：バス)

連載「全部おすすめ…」の筆者は、どんな人？

筆者・柳元宏史(やなぎもと・ひろし)氏は、昨年9月に東京バッハ合唱団に入団(バス)なさいました。「今春の《マタイ》を歌い、内容の深さに感動。ステージで拍手を受ける喜びも味わいました。」

ご出身は鹿児島市。大学卒業後サラリーマン生活を経て、現在、日本キリスト教団経堂緑岡(みどりがおか)教会で奉仕をしながら、東京神学大学大学院に通って、牧師になるための勉強をしていらっしゃいます。今年2月にご長女・彩音(あやね)ちゃん誕生。奥様・彩子(さいこ)さんと3人のお暮らしです。文京区在住。



CDバッハ・カンタータ50曲選[第16巻]に収録。

A 佐々木まり子, T 佐々木正利, B 渡邊明, 合唱: 東京バッハ合唱団, オーケストラ: 東京カンタータ室内管弦楽団, 大村恵美子指揮/訳詞・2000年録音(第87回定演)
演奏楽譜: 「バッハ・カンタータ50曲選」No.43